

観  
⑤ 5885

元 929°  
参拝 社寺に参りて神仏を拝むこと  
⑤ 5826 3/4 錫杖かえ ⑤ 5885  
⑤ 5826 4/4

5892°

5826<sup>P</sup>-2/2

⑤ 5823° 左頁

西田33所観世札

44<sup>P</sup>  
46<sup>P</sup>

2515 11林  
居又 854

■ ともあれ、

長谷寺の観世音菩薩

八西国三十三所観音《礼の第八番札所と

て知られる長谷寺は、観世音菩薩ののみ

ならず、閻魔大王とおおびに地蔵菩薩と

も深いにかかりあいがある✓

とみなされたように観察される。

■ そこで、—————長谷寺の観世

音菩薩像は、地蔵菩薩と観世音菩薩の特徴

を合せ持つ独特のお姿をしておいでなのだろ

う。写真図版801《長谷寺の十一面観音像》参照

こころ 説示されている

⑤ 5444



5826-3/4  
5826-4/4

5.827<sup>P</sup> 1/3

時年669<sup>P</sup>  
西口三十三所 46<sup>P</sup>

徳を併せ持った世に長谷型観音と呼ばれ、二  
姿である。即ち、地藏菩薩と観世音菩薩の御  
と念珠、左手に蓮華模様のある水瓶を持つ特異な  
仙像（写真図版参照）  
この長谷寺の観世音菩薩像は、右手に錫杖  
尺（十二寸余）という木造では我が国最大の  
身の丈三丈三尺六寸（十寸余）、光背四丈一  
金色に輝くご本尊十一面観世音菩薩は、御  
（一五三八）仏師実清良覚の作、と伝えられ  
ている。  
音菩薩は、初め、近江国三尾崎白蓮華谷から  
流出した霊木から、徳道上人によつて作られ  
た。しかしながら、長い歴史の中で数度の災  
難にあい、一一一現在の尊像は、天文七年  
（一五三八）仏師実清良覚の作、と伝えられ  
ている。  
金色に輝くご本尊十一面観世音菩薩は、御  
身の丈三丈三尺六寸（十寸余）、光背四丈一  
尺（十二寸余）という木造では我が国最大の  
仙像（写真図版参照）  
この長谷寺の観世音菩薩像は、右手に錫杖  
と念珠、左手に蓮華模様のある水瓶を持つ特異な  
姿である。即ち、地藏菩薩と観世音菩薩の御  
徳を併せ持った世に長谷型観音と呼ばれ、二

紀下 480<sup>P</sup>  
119



1064<sup>P</sup>  
衆生 一切の生物

書房、  
四六頁參照

米

本社寺大觀ル寺院編、名著刊行会へ長谷寺。  
 7 西国三十三所觀音巡礼ル下休場由晴、朱鷺島。

尊像で、慈悲の深さを表わしてあるという。  
 地藏菩薩は一切の苦しみを一身に受けて衆  
 生を救済するといわれ、観世音菩薩はその名  
 を唱えて救いを求めるものの全てに慈悲を垂  
 れ給うと云ふ。仏である。  
 この両徳を併せ持った長谷寺の観世音菩薩  
 は、奈良・平安の昔から、其の靈驗を以って  
 人々の信仰を集めてきた。という。(7日



5.827<sup>P</sup>-3/3

六道輪廻の世界  
では、六道輪廻の世界  
決まるのかについて、見てみよう。  
来世の行き先を裁く裁判とはいつても、一  
風変わってゐる。何が変わったのか。  
七人の裁判官は、皆、死者に極刑を科した  
くなりと思つてゐる。裁判官とはいえ、彼  
らは仏の世界の幹部なのである。当然、人一倍  
慈悲深い。そこで、七人が七人とも、死者  
の哀願に便乗して、死者を順送りにする  
ある。  
四十九日目に最終決定を下す立場にある泰  
山王にしても、死者に厳しい刑を下したくないと  
思う矣では全く同様である。やはり、最後の  
決定はしたくない。そこで、次のような方法  
で決着をつける。  
■まず、死者に六つの鳥居を指し示す。  
■そのうち六つの鳥居の先には、六つの世  
界がある。六つの世界、――すなわち六  
道輪廻の世界である。ただ、どの鳥居がど  
の世界に通じてゐるかは、まったく明らか  
にされてゐない。そのうえで死者に鳥居を選  
ばせようというわけだ。



H12.1.9(日)  
H9.8.22(金)  
H6.6.13(月)

ろんり  
論理云 2366'

5,828'

こっちはようか、あっちが...が  
5825' 7行

死者は、一かたなく、六つの鳥居のどれか  
を選ぶ。しかし、選びかけては、また迷う。  
「どれを選ぶのも恐ろしい。冥途は、最終  
地ではなく、通過するだけの土地だからである。  
そして、選んだ先か、その人の「輪廻」先  
となる。有無をいわせぬ選択である。  
・ということであれば、一そんなやり方はお  
かしいと思う人もいるだろう。理不尽だ」と  
一か、この方法には、実は、きわめて仏  
法にかなった合理性があるのだ。  
・というのも、この六つの鳥居のうち、どれ  
を選ぶか、その選択眼こそ、その人が  
生前につくった「業」の結果にほかならない  
からである。  
「業」とは、  
「前世の行為」に、必ずその報いがかかる。  
そして、そこからは誰も逃げられない。✓  
という仏教の大原理である。  
■その「業」の論理こそ、死者がどの鳥居をく  
ぐるかという一点にまで、きちんと貫徹され



「とこうで」 5820P  
5855P

仏教の知識 42P

5.829P

5861P 仏教の知識 40P 未

中陰 5812P

前頁 15-19  
1999

てい子のである。

・ともあれ、こういうふうにして死者の行き先、<sup>（りんね）</sup>輪廻先<sup>（さき）</sup>が<sup>（き）</sup>決まる。

■なお、ここまですべてを<sup>（ちゅういん）</sup>中陰<sup>（せかい）</sup>の世界という。

■そしてその後は、<sup>（らいせ）</sup>来世<sup>（なると）</sup>となる。（「仏教の知識百科」主婦と生活社、四〇頁参照）

■<sup>（おそろく）</sup>「三輪山の麓の日海石榴市の八片の衛<sup>（ちまた）</sup>までが<sup>（いり）</sup>冥途<sup>（めいどう）</sup>であって、<sup>（ろくどう）</sup>六道のそれそれ<sup>（た）</sup>に立つ鳥居から先が<sup>（らいせ）</sup>来世<sup>（なると）</sup>である」とうに考えらるたのであろう。

＊

■すなわち、七回の裁判が終ったとき、その人が<sup>（せいぜん）</sup>生前<sup>（せんぜん）</sup>につくった<sup>（ごう）</sup>日業<sup>（にぎよう）</sup>により、六つの世界のうちのどの世界へ行くべきかが決定される。

■それでは、死者が<sup>（てんせい）</sup>転生<sup>（てんせい）</sup>する六つの世界は、どこにあると考えらるたのだろうか。

■この六つの世界——<sup>（い）</sup>いわゆる「六道輪廻<sup>（ろくどうりんね）</sup>」の世界は、<sup>（しゆみせん）</sup>須弥山<sup>（しよみせん）</sup>という山を中心とする世界であるとされている。（「仏教の知識百科」主婦と生活社、四二頁参照）

とこうで、すでに述べたように、往古の人々は、



$\textcircled{\text{P}}$  3727  $\textcircled{\text{P}}$  5803  $\textcircled{\text{P}}$  九山ハ海  $\textcircled{\text{P}}$  3727 777  
 「エ」  $\textcircled{\text{P}}$  5860

日須弥山<sup>ユミせん</sup>を日阿蘇山<sup>アそせん</sup>に比して考えたようである。  
 また、九州から近畿へやってきた者達は、  
 八九州の日阿蘇山<sup>アそせん</sup>に相当する山は、近畿  
 の日三輪山<sup>さんりん</sup>である。✓  
 と考えたのである。うう。（既述）  
 ④ そうしたわけで、人々はいつか、日三輪<sup>さんりん</sup>  
 山<sup>やま</sup>を日六道輪廻<sup>むどうりんね</sup>の世界の中心と見なすよ  
 うになったのかも知れない。  
 ⑤ さて、この日須弥山<sup>ユミせん</sup>（三輪山<sup>さんりん</sup>）を中心と  
 して、四つの州と九山八海がある。（第七十一章）  
 ⑥ 蘇迷盧<sup>そめいろう</sup>の山<sup>やま</sup>の頂において既述）  
 ⑦ まったく種を異にする人間が四種  
 ⑧ 東の勝身州<sup>しょうしんしゅう</sup>、西の午貨州<sup>ごくわしゅう</sup>、南の瞻部州<sup>せんぶしゅう</sup>（閼<sup>えん</sup>  
 浮提<sup>ぶだい</sup>ともいう）、北の俱盧州<sup>くろしゅう</sup>の四州があり、  
 私たちが一般に「人間の世界」と呼ん  
 でいるところは、南の瞻部州<sup>せんぶしゅう</sup>である。  
 ⑨ 地獄<sup>じごく</sup>は、須弥山<sup>ユミせん</sup>世界の四つの州  
 のうちの一つ、瞻部州<sup>せんぶしゅう</sup>（人間の  
 世界）の地下五万<sup>ごまん</sup>時の深さにあるという。



仏教の... 47<sup>p</sup>

5,831<sup>p</sup>

仏教の... 467 m 空界天 } 5881<sup>p</sup>  
微細 36<sup>p</sup> 5万分の地回 兜率天

畜生道 現代の我々は、牛や馬などの家畜を「畜生」といっている。

種類により、人間と棲むもの、と住み家もさまざまであるという。

の、地下に棲むもの、と住み家もさまざまであるという。

餓鬼道 餓鬼にはさまざまな種類（一説に三十六種類）があり、その種類により、人間と棲むもの、と住み家もさまざまであるという。

山に見えるに違いない。

な体となっていて、いるので、ずい分と高く

な高い山ではないか、なにしろ死者が微細な

居天である。

山の山上にぽっかりと浮いている天界が、空

と叫ばれている。この地居天に對し、須弥

の中腹は、地つづきの天なので、地居天

は、須弥山の中腹から始まる。

天界（天上界、天人界ともいう）



改行

改行

改行

存

・いかしそれは下あくまでも現在の常識であって

本当は、あらゆる種類の生き物を含んでおり

その数はなんと三十四億種にもものぼるとさ

る。その日畜生口を大まかに分類すると

へ鳥類・獣類・虫類✓

の三種となる。おなじみのものばかりである

修羅道

阿修羅が支配する世界のこと  
を、修羅界という。須弥山と

持双山に挟まれた海の海底にあるとされる

震る水中大宮殿は、まさに天界を思わせる美

しさである、といわれている。

阿修羅は、もともと正義をつかさどる神で

天界の一つである。忉利天に住んでいた

統治者は、神々の帝王である帝釈天である。

ところが、ある時、帝釈天が、阿修羅の娘を

強引に自分の宮殿へ連れ帰り、凌辱してしま

った。

・この成り行きを知った阿修羅は激怒した



アサヒビルカス 福岡スカイビル A 429(2019)11.24(9回)  
H9.8.23(土) 引越(左。正T  
H6.6.18(土)迄  
→ 令和元(2019)11.25(月)~11.27(4回)

ニ"人ガ"  
権化 845'

5,833

新天といえども、彼の行為は絶対に許せない。  
 ともとが正義の神である。いかに相手か帝

一  
そ  
う  
思  
フ  
た

こうして阿修羅は、闘争の権化、執念の鬼

と化(カ)ル、天(テン)界(カイ)から追(オ)放(ホウ)さ(サ)れ(レ)る人(ヒト)間(カン)より低(ヒカ)

順位に落ちたのたつた。

以来、亡女執にとりつかれ、その狭量さゆえ

に他者を許すとの出来なかつた着か、容赦

な  
く 特 29  
随 あ  
と  
さ  
し  
て  
く  
る  
く  
と  
に  
た  
っ  
た  
と  
い  
う  
。

「仏教の知識百科」主婦と生活、四二一五

三頁參照

フ  
ま  
り  
、

その所在として、四ヶ所か考え

ら  
水  
7  
11  
た  
ア  
と  
か  
命  
ま  
。

① 我々人間加任、人間道（餓鬼道・畜生道）

② 地下にあり、地獄道（餓鬼道）

③ 天空にある、天道（餓鬼道）

④ 海中にある、修羅道

の  
四  
ヶ  
所  
で  
あ  
る  
。

The character '米' (rice) is written on a four-line grid. It consists of a central vertical stroke, a horizontal stroke intersecting it, and two diagonal strokes forming a cross-like shape.



地藏信仰

六道輪廻の世界に生きる人々が、最も恐れ

たのは、地獄道へ堕ちることであつた。

たとえ地獄道へ堕ちてゆく身であつた

としても、何とか助かる方法はないだろうか

であろうか

人々は、救いを求めて、そう考えたに相違

ない。

仏よ、お慈悲をお垂れになつて地獄の責苦

だけは受けないで済むようにお助け下さ

い

そんな時、

三輪山の麓の八達ヶ衝に立つておいでの

お地藏様は、閻魔王の化身だそうなの

「慈悲深いお地藏さまは、地獄道へ堕ち

かかった者達の手を引いて、お救い下さるん

ですってよ

といった噂が、ぱっと広まった。とだろうか。

（『日本書紀』下）日本古典文学大系、小学館書店、九頁、注二八参照

⑤5825  
⑤5818-3/8 5.834  
⑤2552/15

せめく  
責苦 5.1255



元 976  
現世 元  
後期 1000

5.835<sup>2</sup>1/3

「お地藏様。どうか私も救い下さい」  
「さうしてここに、地藏信仰が、にわかにな  
々の間へ浸透してゆくことになったのかも知  
れない。」

\*

中国で唐代の七世紀後半以後盛んになった  
地藏信仰は、日本では少し遅れて平安時  
代後期から広く尊信されるようになった。  
あるいは、日本での地藏信仰は、  
へ三輪山の泰山王の方舎前の分岐点、八達  
え衢に立っておられる地藏菩薩が、  
地獄へ落ちかかっている者達や、すでに地獄  
へ落ちてしまった者達迄も、慈悲の心をもつ  
て、手を引き救いあげてくださる。✓  
というものであったろうか。（日本の歴史

写真図版 829 830 へ地藏菩薩像 参照 474



- ・カウー
- ・右肩の右上(1/4肩)に、  
次女の地蔵菩薩とつりあ  
とて 掘裁下さい。



5, p35<sup>p</sup> - 2/3

レビチ

( 図 3294<sup>p</sup> 1/4 タグゴリノミ )

H28 (2016) 2.12 奥大天祥神社の神宮様に  
700 年。  
「タギゴリノミ」と書いてある。他は寺宮のミで  
「タギゴリノミ」で書いてある。

図 3295<sup>p</sup> - 3/5 大御前寺

おろし  
三輪山の

1204 おろし わざら あち

もと 大御前寺に安置され(11)

たが 神仏分離の際 法隆寺へ

移された。

1404

写真四版 829 地蔵菩薩立像

1304 聖徳太子の像

1304

『仏像の見え 見分方』河原由雄監修、主婦と生活社、平成7年7月刊行の改訂版

・国宝 木像。像高172.7cm。平安前期。奈良県法隆寺金堂。

475

図 3280<sup>p</sup> - 2/3  
聖徳太子の  
11面観音  
56頁参照  
56頁参照  
56頁参照 (64年)



カー  
↑

↑  
カー

・カー  
・右頭の左上  
(1/4頁)に、  
上へはみ出た  
大まぐ掲載  
下さい。  
・暗くおぼろ  
明くおぼろ  
します。

5,835<sup>p</sup> -  $\frac{3}{3}$



476

1309  
『日本の美観』100 別冊宝島 2241号 宝島社、2014年10月13日発行 65頁参照  
重文。木造。像高152.4cm。平安前期。奈良県高市郡明日香村、橿原寺。  
1409  
『真図版830 地蔵菩薩像 (銅) 釈の作例として』日本で最も古い  
1109  
お願は 童願で、まわめて、徳やめであさる。  
1109  
おた



⑤ 5817<sup>P</sup>

山口市を160830  
紀上150<sup>P</sup>140<sup>P</sup> ⑤ 5820<sup>P</sup>  
⑤ 5822<sup>P</sup>

5.836<sup>P</sup>

字莫ないか?

地名辞1017<sup>P</sup>  
紀下8<sup>P</sup>

やまの  
モ山口(山の上り口)

米

九頁注二八参照)

「日本書紀」(下) 日本古典文学大系、岩波書店

辞典「太田為三郎、名著出版へ海拓榴市」。

音・椿市地蔵がある、という。(「帝国地名

では荒村となつてしまつたか、今も椿市観

口に当り、昔は屈指の市街地であつた。現在

なおり、三輪山の麓の海石榴市は、長谷の山

三六五三頁参照)

へ地蔵。。「仏教の知識百科」主婦と生活社

(3) 読売新聞社、一七九一八〇頁。「広辞苑



5841<sup>P</sup>

今昔②-336<sup>P</sup>

5837<sup>P</sup>

今昔②-360<sup>P</sup>  
②-376<sup>P</sup>

イザス  
示現云958<sup>P</sup>  
冥界での話である

地蔵さま入内41<sup>P</sup>  
衆生云1064<sup>P</sup>

●それにも関わらず、地蔵信仰の隆盛の始まりの時期に早くも、  
「地蔵は小僧である」とする考え方が生じていた、という。  
●「地蔵和讃」において、地獄に示現する（衆生救済の爲にあらわれる）地蔵は、「若き僧の美目形うるわしき」ものであり、そして「小き僧」でもある。  
●また、「今昔物語」巻十七の第十八話において、死んで冥途へ至った僧のもとに忽ち来り給うた地蔵のことが、「端嚴美麗」な「小僧」と表現されている。  
●さらに地蔵は「冥界ばかりでなく」地上に出現する時、子供（童）の姿で現われる。  
●「今昔物語」巻十七の第一話（実睿の「靈験」記）においては上巻第三話では、常陸国の十五・六歳ばかりの牛飼の童となつて現出し、  
●「宇治拾遺物語」巻第一の第十六話では、信心深い丹後国の老尼が礼拝した童が地蔵に姿



H 9.8.23 (土)  
H 6.6.19 (月) ⑤  
→

相傳さへる  
由 5842 1/2 69 具現

5.838<sup>P</sup>

坊主頭の陽物

表現前

天つき  
改行

を変えたといいう。

■ そーて、地蔵は口六趣(六道)の衝に立つ

と記さ小ている。(「沙石集」巻五、第五話

■ どうある

へ地蔵は、六道の分岐点に立つ、美目形震

ゆーい小僧である

と考えられた。

■ ここにあえて述べる、

へ小僧の姿で思ひ描かれる地蔵は、必然

的に、人の胴と両足の分岐点(三叉路)に立

つ美目形震わ

た 坊主頭の陽物と同一視さ

ように想到さへる。

■ こうしたわけで、現世の道路の三叉路など

に、お地蔵様が立てられ、

人々の信仰を集めることになったのであろう

と推察される。

■ そーてまたさらにお地蔵様は

たちまちにして古来馴染の深かった口塞

の神(陽物)、つまり口道祖神と習合さ

170



改行

れることになつたのかも知れなり。(「地

蔵さま入門し大法輪閣、四〇〇四一頁参照)

●なるほど、お地藏様は丸坊主の僧形であつ

て、その直立したコケシ形の御姿は、道祖神

(陽物)を想わせよ。●そこで、お

地藏様と道祖神の二つが、無理なく結びつ

たものと思ひ小。

■陽物である道祖神も、陽物を想起させる地

蔵尊も、共に三叉路等に置かれ、人々にあ

かめら小ている。

■こうして地藏尊は、道祖神と同じ役割を果

たすことになり、――――道祖

神と同じくらいたくさん、日本中に立てられ

ることとなつたのであう。〔地藏さま入門

大法輪閣、一四八、一七七頁参照)

\*



いちもつ  
一物 126<sup>p</sup>

改訂

5,840<sup>p</sup>

ちん  
貴う 2203<sup>p</sup>

■地蔵様は、首にかけた赤いよだれかけがよ  
くお似合いの、ほほえましいお姿を  
でになる。

■子供が丈夫に育つようにと、よだれかけを  
つけたり、頭巾をかぶせたりするのは、ごく  
普通のことであるが、安産祈願を受け  
つけるお地蔵さんも多く、乳の出をよくする  
という乳貴い地蔵などもある。

■時には、  
「子宝に恵まれない女性が、夜中、他人から  
られないように行き、お地蔵様を抱いてくる  
と、子宝に恵まれる」

■地蔵様を、男の一物に見立てているのである  
もともと、男根形の道祖神に対して行なわ  
れてきた俗信が、地蔵様に対しても同様に行  
なわれるようになったのであろう。（「地蔵  
さま入門」大法輪閣、五一頁参照）

\*



H9.8.23 地蔵入門131P  
H6.6.23(木) 暁 5P  
地蔵入門129P 184P  
5.841

恒沙 5740P 581152P  
恒河 小村392P  
(カニツスル) 定303P 131P 平安時代  
往生要集 266P

また、地蔵様は夜明け毎にお歩きになる、  
という信仰がある。  
● 往生要集 上・大文第二・第六(平安中  
期の九八五年に成る)に  
「地蔵菩薩は、毎日晨朝(今朝)の午  
前六時頃(ころ)に、恒沙(11)恒河沙、カニ  
ジス川の岸辺の砂浜の定(一定)雑念を断ち切っ  
て心をしずかにする修行(しゆぎやう)に入り、云々」  
とあり、日延命地蔵経(にちえんめいじざうきやう)  
になども見える有名  
な考え方である。  
● ソーテ、日宇治拾遺物語(にちうじしゆいものがたり) 卷一第十六話  
(鎌倉時代の説話集)には、  
「今は昔(むかし)、丹後の国に一人の老尼(らうに)が  
いた。地蔵菩薩(じざうぼさつ)が暁(あけ)ごとにお歩きになるとい  
う噂(うわさ)を小耳(こみみ)にはさみ、云々」  
とある。  
● さらに、日雜談集(にちざだんしゆ) 卷五「地蔵の事」には、  
「ある老人(らうじん)が説法(せっぽう)を聞き、地蔵(じざう)が毎日晨朝(まいにちのあけ)



いま 云々 100 勢然 2043

5.842<sup>1</sup>-1/2

「非常に」と「痛く」とを付けてい 完全なる性全62  
「早朝勢起」

に、人を救うべく家々をめぐる<sup>と</sup>を知った。  
云々  
とある。へ「地蔵さま入門」大法輪閣、一二  
九し一三二頁参照  
■それでは、どうして地蔵様は<sup>あかき</sup>暁<sup>か</sup>ろ<sup>っ</sup>活<sup>は</sup>発<sup>つ</sup>に動<sup>うご</sup>  
き廻<sup>まわ</sup>ら小<sup>こ</sup>るというこ<sup>こと</sup>にな<sup>な</sup>ったの<sup>の</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か。  
■それは、定<sup>じやう</sup>か<sup>か</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>か、  
へ男<sup>おとこ</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>物<sup>ぶつ</sup>が<sup>が</sup>朝<sup>あさ</sup>立<sup>だ</sup>ち<sup>ち</sup>へ<sup>へ</sup>早<sup>そう</sup>朝<sup>ちやう</sup>勢<sup>ぼう</sup>起<sup>き</sup>して、  
た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>な<sup>な</sup>様<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>✓  
を<sup>を</sup>反<sup>はん</sup>映<sup>えい</sup>して<sup>して</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>小<sup>こ</sup>な<sup>な</sup>い。  
■小僧<sup>こそう</sup>様<sup>様</sup>は、<sup>まるで</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>か<sup>か</sup>む<sup>む</sup>己<sup>おのれ</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>志<sup>し</sup>を<sup>を</sup>示<sup>し</sup>す<sup>す</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>よ  
う<sup>よう</sup>に、<sup>125</sup>持<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>主<sup>しゅ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>全<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>無<sup>む</sup>関<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>に<sup>に</sup>✓  
夜<sup>よ</sup>明<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>ご<sup>ご</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>勢<sup>せい</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>熱<sup>いさ</sup>り<sup>り</sup>立<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>で  
あ<sup>あ</sup>る。  
■な<sup>な</sup>お、<sup>まよ</sup>真<sup>ま</sup>夜<sup>よ</sup>中<sup>なか</sup>の<sup>の</sup>真<sup>ま</sup>暗<sup>あん</sup>層<sup>そう</sup>の<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>で、<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>れ  
な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>地<sup>い</sup>蔵<sup>ざう</sup>様<sup>様</sup>が<sup>が</sup>動<sup>うご</sup>き<sup>き</sup>廻<sup>まわ</sup>ら<sup>ら</sup>小<sup>こ</sup>る<sup>る</sup>とい<sup>い</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>な  
ら、<sup>つ</sup>作<sup>さく</sup>り<sup>り</sup>話<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>こ<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>あ  
る<sup>る</sup>か、  
へ夜<sup>よ</sup>明<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>頃<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>、<sup>125</sup>早<sup>そう</sup>起<sup>き</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>達<sup>たち</sup>が<sup>が</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>来<sup>き</sup>来<sup>き</sup>す<sup>す</sup>  
よ<sup>よ</sup>う<sup>よう</sup>な<sup>な</sup>時<sup>とき</sup>刻<sup>く</sup>に<sup>に</sup>、<sup>125</sup>地<sup>い</sup>蔵<sup>ざう</sup>様<sup>様</sup>が<sup>が</sup>毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>出<sup>で</sup>歩<sup>ある</sup>き<sup>き</sup>に<sup>に</sup>なり<sup>り</sup>、  
人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>救<sup>すく</sup>う<sup>う</sup>為<sup>ため</sup>下<sup>した</sup>家<sup>いえ</sup>々<sup>々</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>巡<sup>めぐ</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>なる<sup>る</sup>✓



ろくしゅろく  
六趣 2359 地蔵土ま入内 28<sup>P</sup>33<sup>P</sup>  
六道のこと

5.842<sup>P</sup>-3/2

生理現象 云 1232<sup>P</sup>

というのは、なんと、<sup>も</sup>も普通でない。

■ 恐らく、<sup>も</sup>平安時代当時すでに、

八木朝早く体験するこのようなさうな男

の生理現象をたくみにとらえて、<sup>も</sup>地蔵

信仰と結びつけていたのであらう。

と推察される。

\*

■ 六趣（六道）の衢に立つ地蔵様は、大いそ

がである。

■ 地蔵様は、<sup>も</sup>地獄の役人と交渉して死んだ人

を蘇生の手を引いたり、<sup>も</sup>地獄の苦しみを代り

に受けてやったりして、<sup>も</sup>地獄の鬼たちから信

者を護る。

もつとも、鎌倉時代になり、法然や親鸞に



地藏をす30?

5,843<sup>p</sup>

書き表わす  
広375<sup>p</sup>

「陰」記(保)36,37<sup>p</sup>

トル

よって、

「いかなる悪人も弥陀の大悲で救われる」

という他力易行の浄土教が民間に広まると、

阿弥陀専修の人々は、

・「地藏を信ずる者は地獄に墮ちるぞ。地藏

は地獄にゐるのだから」と言ったり、

・「地藏が阿弥陀と並ぶのは不都合だ」と地

蔵像を引きおろしたりした、

という。(「地藏さま入門」大法輪閣、二七

と三〇頁参照)

「たしかに」(地蔵様と同じように分岐点に鎮

座する男の一物は、通常、上の方から下

の方を覗き込むようにして、下の世界のこ

を案い、――悲しみに打ち震えているよう

である。

そして、「陰(男根)」(記上巻)、ある

いは「陰茎」などと書き表わされることから

察せられるように、

へ一物(コケシ状の地藏様に似た物)は

「陰」のものである

と考えられていたということなのかも知れない。



5,844<sup>P</sup>

一か一物は、常に下の世界を見つめてい  
 るばかりではない。  
 時々毅然として天を仰ぎ、  
 容姿に変身する一物は、  
 友対に、  
 陽物に属するもの、  
 も称されるのである。  
 六道の衆生を救うため、  
 界から派遣されてきた  
 薩は、  
 陽物のものだと解されたのではない  
 だうか。  
 神仏の戸籍しラベ  
 文進堂、二八九頁へ地蔵菩薩  
 識百科し主婦と生活社、六〇頁へ菩薩  
 照

\*

さかろうか

486



$$5.835^{2/3}$$



H29(2017) 11. 26(日) 8回  
H.30(2018) 12.1(土) ~12.1(2回)

(5,869<sup>P</sup> - 7/5)  
5,846<sup>P</sup>

→ H11.11.9(日) 6

中陰 5812<sup>P</sup>  
5829<sup>P</sup>

中(い) 経く 100<sup>P</sup>

た姿に<sup>すがた</sup>変貌<sup>へんぼう</sup>を<sup>し</sup>遂<sup>つい</sup>げたかと思<sup>おも</sup>うと、<sup>い</sup>いつ  
の<sup>ま</sup>間<sup>ま</sup>に<sup>も</sup>やら、<sup>も</sup>ぶらりと<sup>も</sup>戻<sup>もど</sup>っ<sup>て</sup>いるので<sup>ある</sup>。  
と<sup>と</sup>来<sup>き</sup>世<sup>せい</sup>の<sup>ちゅうりんの</sup>中<sup>ちゅうりんの</sup>間<sup>ま</sup>で<sup>ある</sup>日<sup>いちにち</sup>中<sup>ちゅうりんの</sup>陰<sup>いん</sup>の<sup>せかい</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の<sup>はず</sup>は<sup>ず</sup>れ  
の<sup>ろくどう</sup>六<sup>ろくどう</sup>道<sup>どう</sup>の<sup>ちまた</sup>間<sup>ま</sup>を<sup>ちゅうりんの</sup>中<sup>ちゅうりんの</sup>心<sup>しん</sup>と<sup>し</sup>て、<sup>じごく</sup>地<sup>じごく</sup>獄<sup>じごく</sup>に<sup>い</sup>入<sup>い</sup>る<sup>た</sup>。  
り、<sup>ある</sup>いは<sup>げん</sup>現<sup>げん</sup>世<sup>せい</sup>に<sup>あら</sup>わ<sup>れ</sup>たり<sup>して</sup>、<sup>しゅ</sup>衆<sup>しゅ</sup>生<sup>じょう</sup>の<sup>ため</sup>た<sup>め</sup>に<sup>つ</sup>く<sup>り</sup>て<sup>お</sup>い<sup>で</sup>に<sup>な</sup>る<sup>の</sup>で<sup>あ</sup>る。  
う、と<sup>と</sup>祭<sup>まつり</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>る</sup>。

米



H6.6.24(金)⑥  
P

かうけ 大カン  
香花 2477P

研13-261P

5,847P

338P  
流布 世に伝わること

ひごう 伝  
日版 1861P

村のはすめのお地蔵様は、  
いつもニコニコ見てござる

# 地蔵和讃

リッもニコニコ 浮世のようすを見ておい  
でになるお地蔵様は、つね日頃から道行く人  
達の心の奥深くの口真心にまでもそれとなく  
読みとっていらつーやつてー！慈悲深く  
も、地獄への道へ落ちかゝた人の手を引  
き、少しでもましな道の方へとお導びきに  
なるのであろう。  
それにしても、中国では薄かつた子供と地蔵と  
の関係が、日本では特に強調され、地蔵は  
童姿だとか、子供の為めに救済するとかいっ  
た信仰が広く流布したのだ。た。一世界大  
百科事典に平凡社へ地蔵菩薩参照  
それは、地蔵を息子（つまり陽物）に見立  
てたために起こった信仰なのかも知れない。  
そーして、とうとう左わけで、いつしか、子供達  
はお地蔵様と大の仲良し、ということとなり  
旧暦七月二十四日の地蔵盆の縁日には  
子供らが、石の地蔵様に香花を供えて祀るよ



490

$$= 2$$



5,849P

地...入内96P

山子 296P

二つやー 地藏菩薩 19P  
地藏さま入内96P 98P

5853P 39P

九六頁参照)

\*

○そのような親の願いにこたえるのが、地藏  
信仰である。(「地藏さま入門」大法輪閣、

いわが家へ。

○親たちは、その子が必ずもう一度生まれかわ  
つてくることを願った。許されるならば、同  
じわが家へ。

はすはあるまい。とはいえ、西方の極楽浄土  
へ行つて、まうのも困る。

るのだろうか。  
穢を知らない幼子は、まさか地獄へ堕ちる  
から、――いつたいい何処へ旅することにな  
るのだろうか。

■それにしても、二つや三つや四つ五つ、あ

182



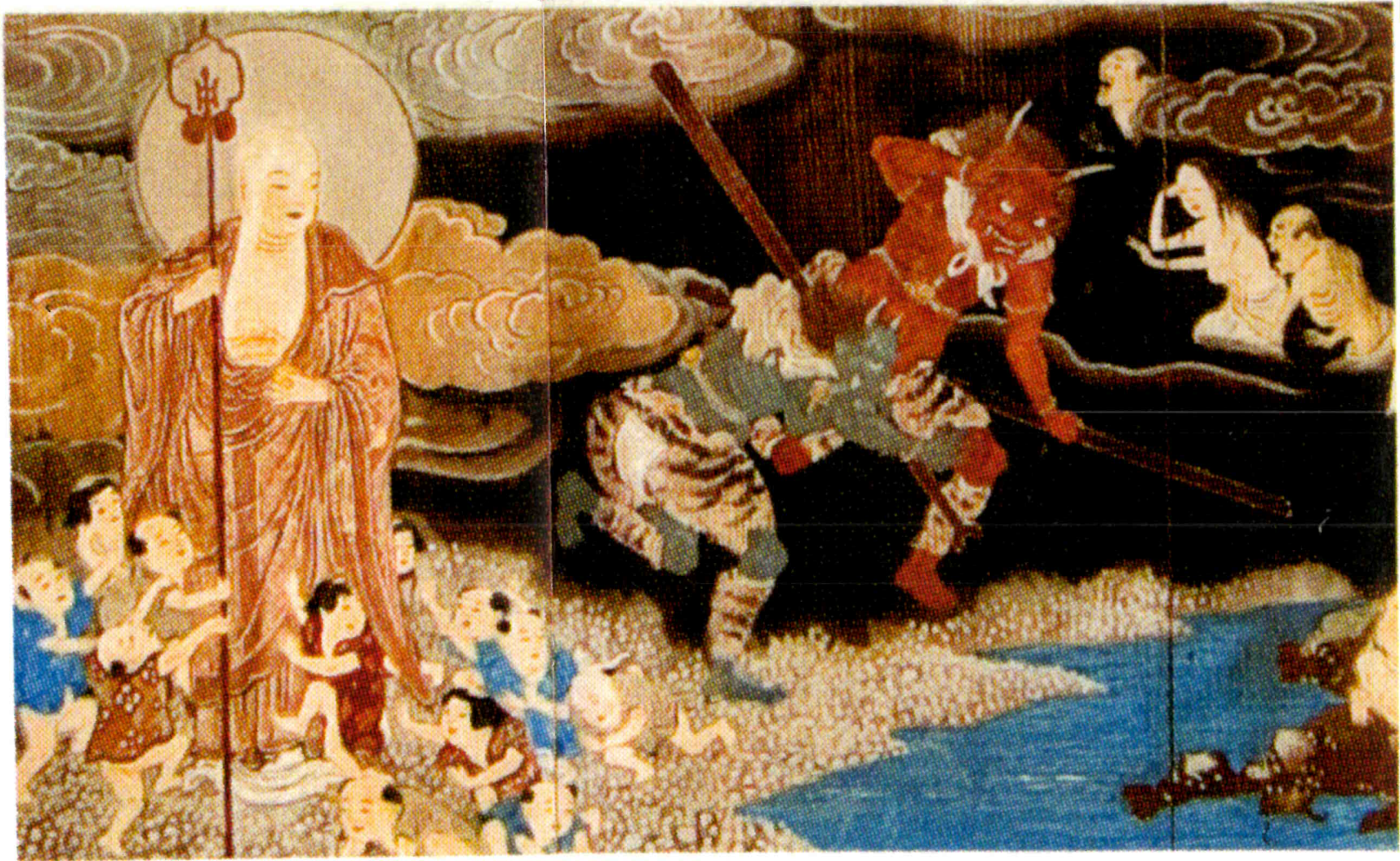
幼い子供達は、死出の山（胸に相当する起  
 伏の多い山）をなんとか越え、なおも進ん  
 でいったとき、そこに懐かしく、臍のよ  
 うな賽の河原を見つけたのであろう。その河原では、  
 小さな子供達が石を取り集め、積み上げてい  
 るという。臍のゴマは、こうして出来るとい  
 うことかも知れない。  
 母の何となく日が暮れようとするころ、臍に鬼が現れ、  
 古事記（上巻）に、「腹には黒雷居り」と記  
 されてゐる。\*そういえば、腹はときどき  
 「ゴロゴロ」と大きな音を出す。  
 鬼は鉄棒を差し延べ、せかく積み上げた  
 塔を押し崩してしまふ。  
 そんなとき、地藏様がゆるぎ出て、子供達  
 をお助けになるという。（「地藏菩薩」紀野  
 一義、集英社、十八、二一頁へ地藏和讃）参  
 照）  
 なるほど、コケシ形のお地藏様によく似た  
 股間の一物は、空を翔り弓なりに伸びてきて  
 血相を変え青筋を立てて、臍に迫る。



5,850<sup>P</sup> - 3/2 縦の線を目立たなくして下さい。

・カラー

・頁の上半分に、  
大きくはみ出し  
掲載下さい。



142G 第565図 太山寺鐘樓地獄極楽絵図 (愛媛県松山市)

132G

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠 帝国書院、平成24年7月12日発行、14頁参照

122G

・賽の河原の鬼どもも、地蔵菩薩には手が出せない。



也方手た  
⑤5834<sup>P</sup>

コクヨ ケー20 20×20



な お、日本人の歌の中、最も息の長いものは、  
曰子守唄とこの曰地蔵和讃とではなか  
らうか。  
● 幼い子を亡くした父母の歎きという共通の  
地盤に立ち、さらに死んだ幼児を救って下さ  
るのはお地蔵さま以外にないという共通の  
心理から、曰地蔵和讃は日本国中津々浦々  
で愛誦され続けてきたのであろう。  
■ もっとも地蔵和讃は一つや二つでなく、原  
形と思われ、ものの他、さまざまに彩りを  
加えたものがある。ここに、あまたの  
地蔵和讃の原形であらうかと、いわれ  
我々の耳にもっとも親しい、伝空世上人御作  
といわれ、地蔵和讃を載せておくことにし  
よう。  
\* 空世上人は、醍醐天皇の皇子といひ、また  
常康親王の皇子ともいわれるが、詳らかでない。  
(「地蔵菩薩」紀野一義、集英社、一六二二  
二頁。「地蔵さま入門」大法輪閣、一七二頁  
参照)

(\*)



追善 1471 妙善の冥途 所子のため善事を言うこと  
作 890 善報をうけること  
5,853P

同歌 地蔵菩薩 19P  
これを裁せて地蔵門 172P 1字下げる

遠し 我れを冥途の父母と  
て 冥途の旅に來たるなり  
蔵尊 積みたる塔を押し崩す  
れを恨むること勿れと  
の嘆きは汝等が苦患を受くる種となる  
暮水の嘆きにはむごや悲しや不敗やと  
りし父母は追善作善の勤めなくただ明け  
で遊ぶとも 陽の入相のその頃は地獄の鬼  
が現れて や水汝等にはなにをす  
父のたため 二重組人では母のため 三重組人  
め 此水にて廻向の塔を組む 一重組人では  
父のたため 二重組人では母のため 三重組人  
では故里の兄弟我身と廻向して 昼は一人  
の みどり子の所作として 河原の石を取り集  
声とはこと変り 悲し 泣く声は 此の世の  
恋し 母恋し 恋し 西院の河原に集りて 父上  
らぬ みどり子が 西院の河原に集りて 父上  
哀れなり 二つや三つや四つ五つ 十にも足  
野なる 西院の河原の物語 聞くとつけても  
この世の事ならず 死出の山路の福



1  
字下げ

頼めよと 幼きものをみ衣の裳のうちにか  
 き入れて 哀れみ給ふぞ有難き 未だ歩まぬ  
 みどり子を 錫杖の柄に取り付かせ 忍辱慈  
 悲のみ肌を 抱き抱へて撫でさすり 哀れみ  
 給ふぞ有難き 南無延命地藏大菩薩

力

オン  
カ、  
カ、  
カ、  
ヒ<sup>n</sup>、  
サン  
マ、  
エイ  
ソ

✕



H29(2019)11.27(月) 5,1(19)~5,1(3回) 5,855P  
 令和2(2020)7.14(水)~7.18(4回) 5,247P 5,339P 5,210P 5,328P 5,436P 5,829P 5,870P-3/2  
 元禄 5,1(19)~5,1(3回) 5,855P  
 天保 5,247P 5,339P 5,210P 5,328P 5,436P 5,829P 5,870P-3/2

ところであつて、天武八年(六七九)五月  
 六日の日吉野の会盟において、天武天皇は  
 朕が男等(実は天智天皇の子二人と天武天  
 皇の子四人、あわせて六人)は、それぞれ母を  
 異にして生まれ、いまは同じ母から生ま  
 れた兄弟のようにつくしもうし  
 と言われ、御衣の襟を開いて六人の皇子たち  
 を抱きになり、  
 「もし自分がこの誓ひにたがったら、たち  
 まちわが身はなまものになろう」  
 とお誓ひになつた。皇后も、天皇と同じよう  
 にお誓ひになつたという。(記)  
 あるいは、天武天皇は襟を開いて衣の内  
 に皇子を一人抱き、そののち引き続いて皇  
 后が襟を開いて衣の内にその皇子を抱き(腹  
 中に宿し)、こうして、天武天皇と皇  
 后とは、皇子を生む所作を、六回繰返された  
 のかも知れない。  
 天智天皇の子等も含めて、朕が男等

と記されてゐるのだ  
 5858P 1999  
 587F 436P 199